MEXICO思い出紀行

40年振りの邂逅と40年振りの感動

文と写真　清水　正俊（70年大学商学部卒）

紀行

ソチミルコ・ボートコースにて　左から村井富雄、3人おいて、清水正俊、新井喜範

この度還暦を機に、同志社大学3年次生（20歳）でメキシコ・オリンピックボート競技の「エイト」選手として参加した時の会場だったソチミルコの五輪ボートコースと五輪関連施設、そして当時巡った観光コースをもう一度、今度は夫婦で見に行こうと「Mexico思い出ツアー」を企画した。メンバーは、五輪参加メンバーのうち当時のポジションでBow（バウ）の新井喜範（70年大学商学部卒）、7番の村井富雄（71年大学経済学部卒）、Strokeの清水正俊の各夫婦計6人である。そして1968年のオリンピックからちょうど40年経過した2008年のMexicoへ向かった。

スケジュール

10月16日　伊丹→羽田→成田→ヒューストン→Mexico City

10月17日　Mexico City観光
当時巡ったコース、歴史地区、博物館、ティオティワカン遺跡ほか

10月18日　オリンピック関連施設→ソチミルコ・五輪ボートコース

10月19日～21日　リゾート地カンクン・チチェンイツァ遺跡

10月22日、23日　カンクン→ヒューストン→成田→羽田→伊丹（帰国）

現地日本人ガイドによるとMexico cityは1968年当時に比べ大きく変化し、Mexico Cityの人口は1968年の約1,800万人から2008年には2,300万人へと大幅に増加していた。五輪開催後、一気に先進国入りを果たした日本のようにはなれず、しかも産油国にも拘わらず債務国に転落する等混迷が続く。また一握りのファミリーが70％の富を占めており農地改革も実施されず、貧富の差は激しく、かつ政局は不安定のままである。そして、食い詰めた人たちがcityに流れ込んできた。治安が悪化し、当時のMexicoののんびりしたところはまずないとのこと。また、夜間の外出、流しのタクシー厳禁と厳命される始末。そして周りの山々の頂まで違法建築らしき家々が雑然と続く。そして走れば車、車の大渋滞、信号で車が止まるたび車の群にむらがる売り子、売り子子…。社会インフラ投資は止まったままで、貧富の差はさらに拡大しているようだ。

17日の市内観光は後日談として

18日は五輪関連施設を巡った。半分冗談で私の40年前の五輪選手IDカードを持参した。「そんなモノよく持っていたな」と冷やかされたが、まずスタジアムへ。入場行進まで待たされた広場はまだあった。スタジアムの外見は殆ど改修されていないためくすんだ感じ。中へは入れなかった。聖火ランナーは五輪史上初の女性だったことを思い出す。続いてスタジアムの近隣にある大学都市へ向かう。緑の多い広大な敷地内に点在する建物の壁は壁画になっており鮮やかな色、色。アステカのイメージ。現代アートが、40年前と変らず楽しませてくれた。

そして当時の選手村へ向かう。当時の選手村は公団住宅になっていた。周りは40年経て木々がうっそうと生い茂り内部は窺いしれなかった。IDカードの提示による入場交渉も、事前申請がないとダメだった。聞くところによると、外部侵入者による強盗が頻繁に発生し、入口のセキュリティが強化されていた。

選手村到着後、レストランへ案内された時「アキ！」と言われた。新井が「ココという意味や」と通訳？した。たしか、大学で第2外国語はスペイン語を履修していた。本人は忘れたと言うが…。

構内に入れなかったこともあり、思い出のレストランも不明。当時、食事はもう一つで、大使館で食べたカルフォルニア米のおにぎりがうまかったことを思い出す。選手村入口付近の当時の面影は、建物のみ確認できたが壁面の色等は変わっていなかった。帰り際に、当時、選手村入口付近にあった派手な色のモニュメントの一部が残っているのが見えた。

いよいよソチミルコへ

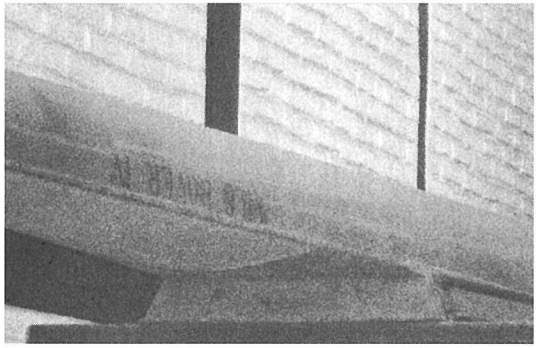
ここはいわゆる水郷地区、そもそもMexico cityは湖に浮かぶ都市で、その形成経緯が一番わかりやすく残るところとのこと。隣が目的の五輪ボートコースである。当時、この水郷を行き来する舟遊び用ボートの綺麗な屋根だけがよく見えていた。まさしく日本の水郷めぐりの感じで屋根が違うだけ。船頭が1本の長い竿でゆっくりゆったりとボートを操る。物売りのボートが近づく。「ビール？」「おみやげ？」マリアッチの楽団ボートが近づく。150ペソで2曲をリクエスト。「シェリト・リンド」と「ラ・バンバ」。トランペット、ギターそしてバイオリンの響きが心地よい。ビールを飲みながらの楽しい舟遊びであった。

いよいよ目的地の五輪ボートコースへ向かう、近隣なのに道路が大渋滞、15分の予定が1時間もかかる。入口を聞きコ

ースへ。当時の入り口より南側に移動していた。スタンドの横から入る。見えた！あの時のままのコースがあった。カヌーのレース中だった。なんと楽団付きで応援している。「マリアッチ」が聞こえる。この楽しみ方は何だ。

コースは日本の戸田オリンピックコースクラスの整備がされていた。ブイは整然と並び大半の糸杉が40年の間に大きく成長し、重厚な落ち着きのある雰囲気のコースになっていた。また少し肌寒く、何ともいえぬ透明感が辺りを包んでいた。そして２０００ｍ先のスタート付近はかすんで見えない。艇庫へ向かう。ある、ある、エイト、フォア、ペア、スカル等が置いてある。またMexicoナショナルカラーのオールが見える。村井が大きな声で叫んだ。「wild roverがあるぞ！」「なに！」15番艇庫にそれはあった。

格子シャッターが下りていたが中が見える。上段に飴色のあの艇が見えた。「wild rover Ⅳ」の文字がかすかに読み取れる。これはなんということか。まさかここにそのままあるとは。当時は16番艇庫でペルー、ポーランド、オランダと同居していた。なんとその隣に。ここに来るに当たって「wild rover Ⅳ」のことは全くと言って頭にはなかった。ただ、もう一度あのソチミルコ、20歳の時のソチミルコに行きたい。それだけだった。それが！我々を初優勝に導きそしてMexicoに連れてきてくれたあの艇が。感動で3人は思わず声が詰まった。涙が出てきた。女房連中ももらい泣き。


かすかに見えるWILD ROVER Ⅳの名前

現われた管理責任者に、経緯を聞く。１９６８年の五輪終了後にメキシコ体育協会に売却されたことまでは知っていた。その後、アメリカ国境に近いモントレー工科大学に払い下げられ今に至るとのこと。使用されていないが、きっちり管理してあるとのこと。大事にされていたのだ。40年、普通なら廃棄されていてもおかしくないのに。改めてモントレー工科大学に感謝したい。日本に持ち帰り瀬田川（大津市）にある艇庫（大学体育会ボート部合宿所）に安住をさせたいものだ。ガイドが「この後をきっちりつなぎます」と言ってくれ、新井が窓口になることになった。

そしてコース周回道路へ回り１０００ｍ付近まで行く。思わず3人から出た言葉「ああ　この付近でもう死んでいたな」。そう、ここから２２００ｍ高地特有の低酸素と気圧の影響を一気に受け、ゴールまで体も動かず、呼吸もままならず地獄だった。今日この日は、奇しくも40年前の10月18日、順位決定戦でとどめを刺された日でもある。なんという符号か40年前のことがよみがえってきた。

『１９６８年10月13日その日のソチミルコは太陽が無情なまで我々を照りつけ一層緊張度を高めた。すでに予選レースは小艇の部から始められていた。もうオリンピック開始の興奮があたりをすっかり包んで、我々をも巻き込んでいた。コースの前方にそびえる暗緑色の小高い山が異様に大きく見え、メキシコ特有の青い空と白い雲が昨日とは違って一層青く、一層白く見えた。とうとうその日が来たのだ。（中略）果たして２０００ｍ漕げるだろうか。我々のレースの前に行われた小艇の部ではレース途中の棄権者、レース後倒れるものが続出した。海軍のフロッグマンまで待機している。それを見る度ますます不安になり、焦燥感につきまとわれた。（中略）各艇スタート地点につき方向、舳先をなおす。審判が「チェコスロバキー・プレ」「メヒコ・プレ」「ハポン・プレ」等々、各艇に指示を与える。号令は英語ではなくフランス語だった。さあ来たぞ。スタート用意をする。やるだけしかない。「エトブプレ・パルテ（用意・GO）！」かくしてレースは始まった。

スタートはうまくいった。さあ力漕だ。足の蹴りをさらに意識する。カナダのオールがきらきら光っている。その向こうのソ連の赤いシャツも見える。5本も漕がないうちにも一つ向こうのソ連、西ドイツが視界から消えた。まだカナダは見えている。「大きく行こう。さあ行こう」いよいよコンスタントだ。メキシコとは大きく水が開きだした。まあここには負けないだろう。５００ｍ通過、まだカナダは先に見える。カナダに負けるか！　しかしどうもスピードが鈍い、オールにかかる水が重い。呼吸器官が締め付けられてくる。リズムが狂ってくる。おかしい、ますます水が重く感じてくる。くそ！足を蹴る。オールの日の丸が異様に赤い。もうカナダの姿もない。やっと１０００ｍ通過あと半分だ。負けてたまるか（中略）もう必死だった。オールを握る腕がしびれてきた。足の蹴りも鈍ってきた。前後運動しているだけだった。苦痛はますます私を押し包む。「力を振り絞って漕ぐ。「ファイト！頑張れ！」コックスが叫んでいる。コースの周囲の林がなんだか墨絵のようにみえる。胸が締め付けられる。そしていろいろ頭を過り浮かび消えていった。メキシコにも抜かれた。ラスト・スパートの声が掛った。必死でピッチを上げた。最後の力を振り絞ってピッチを上げた。もう目の前が真っ黒だった。「イージーオール」ゴールインだ。瞬間後ろに引っくり返った。心臓は破裂しそうに鳴り続け、ゼイゼイただ大きく息をするだけだった。どうやって艇庫に戻ったか覚えていない。

敗者復活戦も順位決定戦もいうことをきかない体に鞭打ってレースに臨んだ。支えていたのは「気力」だけだった。「とにかく漕ぎ通そう」とやっとゴールにたどり着くだけだった。これが繰り返され全てのレースが終わった。（中略）

選手村ではチェコ事件後のソ連とチェコ選手の対照的な態度。南アフリカの参加問題から波及した白人と黒人の対立等が直に感じられた。特にアメリカ選手団の白人と黒人が二つのグループに分かれ口もきかず食事をしているのは不自然だった。表彰台で黒い手袋をして星条旗に拳骨を上げ人種差別に抗議をした陸上のカーロスとスミス。「黒人が五輪に政治を持ち込んだ」として次の日、2人は選手村を追放された。追放される程の悪いことをしたのか。カーロスはいつもアフリカの民族衣装を着ていた。これも抗議の一種か。（中略）

そして詳しくはわからないが五輪開催前に暴動があったらしい。選手村の門前はいつも武装した多くの兵士と警官が警備をしている。（中略）

楽しいこともあった。陽気な国柄は、敗戦ショックに打ちのめされた我々を

優しく包んでくれた。メキシコ・ボート選手と知り合い、彼の友人達と遊びに行ったチャプルテペック公園、ソカロ広場、そこで聞いたマリアッチなどは思い出だ。選手村での各国選手とのたどたどしい英語での交流。チェコのチャフラフスカはきれいだった。（中略）

我々の練習中、表彰台前で国旗掲揚と国歌の練習をしていた楽団が気を利かせて「君が代」を演奏してくれた。外地で見る「日の丸」と「君が代」それは限りなく美しく見え、美しく聞こえた。帰国後のすし、うどんがうまかったこと。ああ俺は日本人だった。』

＊1968年「同志社スポーツユニオン」に寄稿した内容を一部手直し、また略して挿入。

今から思えばあのレースへの臨み方は無茶苦茶だった。全日本選手権初優勝に伴っての期限ギリギリ9月2日の代表派遣決定。また、「wild rover Ⅳ」も港湾ストで到着が大幅に遅れ、実質10日余りの調整。事前の高地順応訓練もなく、不安のまま本番に突入。本来の力の半分も発揮できなかった。

1969年は屈辱を果たすため、新メンバーには挫折している暇はなかった。「屈辱をバネに」これが秘めた合言葉だった。我々は、あの時我々の遥か上をいく各国のレベルを眼の当たりにした。アメリカのパワー、ソ連のスプラッシュ（水しぶき）も立たないキャッチ、西ドイツのロスのない引き、オーストラリアのキャッチ前ギャザー（ため）と素晴らしいストロークを脳裏に焼きつけた。少なくとも我々はもう井の中の蛙ではない。「rowing」の理想を追い求めた。練習方法も一から見直した。目指す形は、はっきりしている。この1年は本当によく練習をした。その結果レベルは一気に上がった。基礎体力も、ローイング・スキルも、スピードも、精神力も。そしてⅣ世の後を受けた「新Wild Rover Ⅴ世」もよく走った。7番の村井と「オールを浸けるのが怖い」と言わしめるスピードで、エイトの中のエイトだった。1969年は全レース敵なし。圧倒的強さだった。

やがてメルボルン大学を迎えた全日本選手権が始まりそこで全てを表現した。2連勝で「秩父宮杯」は再び箱根を越えた。そして1969年1年限りの伝説は終わった。私にとって「オリンピック」を振り返ると、どうしても68年、69年の2年にわたってしまう。

改めて思う「wild rover Ⅳ」を。初めて秩父宮杯という栄冠を初めて掴んだ艇、そしてオリンピック出場という「栄光」と敗北の「屈辱」を持つ艇、我々の人生でキラリと光るモノを与えてくれた艇。ここMexicoで40年間我々が来るのをただじっと待っていてくれたのだ。

＊「Wild rover」は校祖新島襄がアメリカに渡った時の船の名前で代々「エイト」の名前としてきた。現在は17世。校誌にも入れて欲しい話だ。

今日は1日は終わった。その後食事。途中ソチミルコの話でまた盛り上がり新たな感動が。女房殿たちも含め共有する。「来てよかったね。」

今日のこの感動が全てを一気にきれいにしてくれた。胸のどこかに仕舞い込み、くすぶっていたあの時のこだわりまでも。

40年振りのCityの主なストリートは若手芸術家のオブジェが並びストリートミュージアムに。「国立人類博物館」と特に「ティオティワカン・ピラミッド」とユカタン「チチェンイツァ」は世界遺産にもなり圧巻…だった。2度目の「ティオティワカン」はさらに発掘が進み規模も大きくなっていた。

前日の10月17日、メキシコ市内観光で「3文化広場（トラテロルコ）」を再び訪れた時ガイドから当時ここで起こった惨劇の話があった。

それはオリンピック開催10日前の1968年10月2日この広場に集会中の約8000人のオリンピック開催反対勢力の学生、労働者に対し戦車で包囲した軍隊が銃撃を加え300人以上？（公式発表44人）を殺害したとされる事件のことだ。それをここで初めてガイドから聞いて「そんな事があったなんて」と改めてショックを受けた。ガイドは我々と同年齢で、どうも元学生活動家？のようだった。説明が熱い。帰国後改めてインターネットで検索すると「トラテロルコの虐殺40周年を迎えて」の記事があった。「（前略）2008年アムネスティ・インターナショナルはメキシコ政府に対し、いまだ何一つ責任がとられておらず、誰一人裁かれず、誰が命令したかも明らかにされず、死者の数さえ判明されていないと批判し正義を行うように求める声明を発表した。（後略）」

68年は世界中で「フランス5月革命」「プラハの春」等民主化運動が起こり、アメリカではキング牧師の暗殺、日本でも学生運動等によって大荒れの時代であった。69年は大荒れで卒業式も卒業試験もなかった。

あの当時、「3文化広場」（アステカ遺跡の上にスペイン統治時代の教会跡そして現代の高層アパートの三つが一堂に建つ）の観光としての説明はあったが、事件のことは全く触れられなかった。我々は何も知らずオリンピック期間中もその後もずっと…。「メキシコよいとこ」と踊っていたのだ…。光と影、いろいろあるよな

「私はこの時二十歳だった、だがこの年齢が一生のうちで一番美しい年齢だと誰にも言わせまい」（ポール・ニザン著「アデン・アラビア」の冒頭より抜粋）

難解な小説だったが、何故かこの冒頭だけは明確に覚えている。

卒業後の新井は家業を継ぎ同志社大学ボート部監督と艇友会幹部に。村井は地元に戻り新井同様家業を継ぎ母校小松高校ボート部コーチを5年務め、2人の教え子がオリンピック選手となる等貢献した。私は「ボート」とは無縁のまま、全国をウロウロし、高度成長とバブルを経て、リストラの嵐をかいくぐり？定年を迎えた。会社の同僚には私の「この体験」は殆ど伝えていない。この体験は私にとって血となり肉になり生きた。そして私を支えてくれた。そのことに改めて感謝したい。今回の紀行はそれに気付かせてくれた邂逅だったのか。メキシコ紀行はここに終わる。

アディオス　MEXICO、グラーシャス　MEXICO

【プロフィール】
清水　正俊（しみず・まさとし）
三重県四日市市出身　県立津高校卒。
1970年大学卒業後、松下電器産業㈱（現パナソニック㈱）入社。2008年3月松下ロジスティクス㈱（現パナソニック・ロジスティクス㈱）を退職。現在、大阪府池田市在住